

批評・紹介

Очерк Истории Тангутского
Государства.

Е. И. Кычанов

Москва 1968. pp. 353-i-iii

本書クチャーノフ著『タングート國史略説』は、まさに、西夏歴史の研究に、新しい段階をもたらしたといつて過言ではない。レーングラードにあるアジア諸民族研究所の西夏研究班の責任者である著者は、これまでに西夏に關する多くの論文を發表しており、西夏史研究の最先端をいく學者である。その人がいままでの研究の集大成として刊行したのが本書であり、これが以後の西夏史研究の一つの出發點になることは疑い得ない。

西夏史の研究は、中國資料のみに頼る限り一定の限界があつた。

日本の研究者も、西夏史の解明に數多くの寄與をして來たのは事實ではあるが、いずれもその限界を越えることができなかった。本書で著者クチャーノフが利用する資料は、やはり中國資料が主體ではあるけれども、西夏語で記録された文獻によつて、その缺を補つて、全體を上手にまとめている。しかしながら、西夏史料としてまとめた西夏文獻がまだ發見されていない現段階では、もちろん部分的な補足の域を大きく出ることがないのはいたし方がない。

筆者は、西夏史を専門とするものではないために、以下の紹介・

批判は、かなりかたよつた形になるであらうけれども、本書を一讀して得た結果の一部を、ここに記しておきたい。

まず本書の構成について述べると、序文と結論を除いて、本文は九章からなっている。

一章 西夏國興起前のタングート諸族

二章 獨立國タングート國の興起

三章 西夏國

四章 元昊統治時代のタングート國の政治

五章 十一世紀中頃の中央政權の衰頹と西夏の諸戰爭

六章 新高揚途上のタングート國

七章 十二世紀後半のタングート國

八章 西夏の文化

九章 西夏の滅亡

(著者はタングートと西夏を嚴密に使いわけているわけではない。Тангутского Государство は「タングート國」に、Государство Си Ся は「西夏國」と譯した。)

この目次からわかるように四章は初代皇帝景宗元昊の時代、五章は二代毅宗諒祚、三代惠宗秉常の時代、六章・七章は、四代崇宗乾順、五代仁宗仁孝、六代桓宗純佑の時代、八章は仁宗の時代に最盛期に達した西夏文化の概觀、九章は七代襄宗安全以後滅亡までの時期をそれぞれ扱っている。

まず序文において、西夏史研究の基本資料を紹介する。『宋史』、『遼史』、『金史』、『元史』、『夢溪筆談』などの原資料と、『西夏書事』、『西夏紀事本末』、『西夏記』などの後代の資料を解説し、以下各章において、『西夏書事』とともに、その記載を十分信頼して利

用している『西夏記』には、西夏國に關する中國の知識の眞の百科辭書であるといっている。この序文でとくに解説されていないが、著者が引用し、日本の研究者が使っていない中國資料に、周春の『西夏書』がある。戴錫章の『西夏記』につけられた胡玉縉の序に、『周春西夏書、雖分十卷、摭拾殊疏』とあるが、クチャーノフは、本書で、七〇頁、八三頁、二〇三頁と數回言及する。卷末の中國語、日本語による文獻目錄をみると、『嘉慶甲子、序の日付は一七九六、北京大學圖書館寫本』とある。嘉慶甲子は、實は一八〇四年であるが、序の日付は、嘉慶丙辰となつているのであるうか。同じ目錄の中で、『西夏紀事本末』を光緒年一八七五—一九〇八とするが、この書物の成立ははっきりして、光緒戊子一八八八年である。

序文の終りで、著者は西夏語で書かれた資料について、つぎのやうに云っている。

「レニングラード・アジア諸民族研究所 (ЛЕНИНГРАДСКАЯ АЗИАТИЧЕСКАЯ ЭТНОГРАФИЧЕСКАЯ И ИСТОРИЧЕСКАЯ ЛАБОРАТОРИЯ) 所藏の西夏文コレクションは、この仕事で、わずかの範圍ではあるが、西夏の國家機構と西夏文化の項で利用した。西夏文字の意味についての情報が不足しているから、基本的なむづかしさは、それを讀破する際に起つてくる、歴史研究にとって有用であるかも知れない西夏文の範圍が甚だ廣大であつて、それに熟達するのがとても重要な課題である」。

一章は、(1)タングートの祖先、(2)十世紀のタングート族、(3)タングートの呼稱についての三項目に分けて論じる。はじめの二項は、唐代における黨項、拓跋赤辭以來、李思恭、彝昌、思諫、仁福、彝超、彝興、克叔、繼筠、繼捧、繼遷への發展を述べ、第三項では、

岡崎精郎氏の記述（『唐代に於ける黨項の發展』注五）にしたがつて、寺本婉雅の *thar-stud* 説、青木文教の *thar-t'od* 説を紹介、西夏人の自稱は *mi*、チベット人の呼稱は *mi-nyag* と説明する。R・スターン教授のチベット口承文學の研究にもとづいて、チベット人が中央チベットの *bod* に對立して、東北チベット地域の非チベット族を指した *Idon* が中國人が使う黨項と疑いもなく關連しているという (R・A・Stein: *Les tribus anciennes des marches Sino-Tibétaines*, Paris 1961)。

これは秀れた着想ではあるが、筆者は、ただちには賛成し難い（山口瑞鳳「蘇毗の領界」注六六（四三頁）『東洋學報』五十卷一九六八參照）。スターン教授の研究から *Idon* が *mi-nyag* と結び付き西夏の別名であることはほぼ間違はない。筆者は、*Idon* は單に西夏の別名ではなく、西夏國を形成する一族の名前であると考えた。したがつて *mi, mi-nyag* と並行して *Idon* がいたことになる。やゝ *riangs po-ti bse-xu* の物語の中で *Idon* と並べられる *spo-chu gdon*、そこから來源した *drug-po Idon* もやはり西夏の一族であることも確かであろう。筆者は、西夏人の記録から、これを證明できると思う。『文海』の中で平聲二韻平聲四十八韻に *雜錄 po* (པ་ལྷན་པོ་) が登録され、その注に「先人の名なり」とある。これが *spo-chu* にあたり、同じく平聲二七七韻に「*kmuh* なり。黑頭の父。先人の名なり」と注される *ཁུ་མུ་པོ་* (*drug-pa* が該當するのである。この二つは共に西夏人が先人の名なりと認めているから、*Idon* に直接對應する西夏語は不明であるにしても、*spo-chu, drug-po* はいずれもタングート族・チベット族に傳わる口承文學に登場するタングート族の祖先の中の二人と考えてよい。

しかし、一方黨項という呼稱は、非常に廣い意味に、そしてより廣い範圍において使われており、必ずしも西夏國を形成した主要部族のみを指すとは限らない。したがって、クチャーノフが述べるように、タングートという名稱は呼稱の起りと、その使い方の二つの面から検討しなければならなくなる。著者はこの問題についてつぎのように結論する。

「その起源についてみた部族名タングートはチベット人の呼稱あるいは中國人の東北チベット諸族に對する呼稱、おそらく古い時代からあって、土着起源の呼稱と關連する。部族名タングートは、中央アジアの諸族のもとで、起源が等しいと考えられたチベット族やタングート族を指すのに使われた」。

今の段階では、「Don」と黨項の結びつきは、一つの可能性として認めるより外はない。なお、本書では述べていないが、クチャーノフの黨項拓跋に關する考えを紹介しておこう (K. Ippolitov, *Этно-ребра Тяньцзян, Москва 1964* 9pp.)。

七世紀のはじめ以來、のちに西夏の王室になる支配部族を、中國では拓跋部とよんだ。

これは、元昊にとって、北方中國との關係を要請し、鮮卑起源となえ、拓跋魏との關連を主張することを可能にした。しかし、黨項拓跋が拓跋魏の子孫であるかどうか、あるいは鮮卑の黨項まがいの子孫であるかどうかについては、十分な論據に缺ける。黨項部族のリストは今でも残っているが、その中に拓跋の名前は見えない。

だが、鮮卑と黨項部族の間に何らかの接觸があつた可能性を否定し去る理由はない。いくつかの資料で示されているごとく、兩者の接觸は、政治の面で多くあつた。鮮卑が黨項族の民族起源に關與した

ことはあり得ないことではない。この方向に進む黨項拓跋の起源の研究は、我々に多くの知識を加えることになるだろう。

黨項についても拓跋についてもクチャーノフは諸説の中間の立場にたつて、早急に結論を下すことを差控え、今後の研究に多くを期待する慎重な態度を示している。

二章は、(1)獨立への闘争、(2)臨州の攻圍、(3)宋によるタングート國の承認、徳明の統治、(4)タングート・ウイグル戦争、に分けて、李繼遷の誕生からその活躍、宋との交渉、徳明への繼承、徳明の統治時代など西夏國成立までのいきさつについて論じる。

三章は、(1)タングート國の呼稱について、(2)西夏の領土と地理的環境、(3)西夏の住民、(4)住居、移住、衣裳、タングートの慣習と儀式、(5)西夏の經濟、畜産、農耕、手工と狩獵、交易と財政、(6)西夏の社會組織、(7)西夏國機構、(8)タングート軍、西夏の軍事組織、(9)元昊の皇帝稱號の受理に分けられる。

まず、タングート國の國名いわゆる西夏國名考として知られる問題を論じる。これには曾て、ネフスキー・王靜如の論争があつた

(ネフスキー・石濱純太郎「西夏國名考補正」『龍谷大學論叢』三〇五參照)。西夏は大夏國と稱したが、公用の完全な名稱は磽𡵓

燒白高大夏國といった(普通は白上大夏國と譯されている)。王靜如はこの「高い」にあたる文字は、實は西夏を意味する𡵓を音譯したものであつて、この國名は「白𡵓大夏國」と讀むべきであると主張した。そして、この𡵓はチベット語の𡵓。人間」と結びつ

き、白は四川岷山から流れる白水と關係があり、七世紀にタングート族は四川から甘肅に移動したと考えた。しかし、別に西夏を意味する𡵓という文字があるから、「高」にあたる文字がその音

譯である筈はない、ネフスキーは「高」の文字は *yu* とよむのではなく、*tye* とよむべきであると説いた。(H. A. Нечкин: *Татарская Филология, Москва 1960* 「タングート文獻學」 I 三五頁、これは *yu* および *tye* とすべきで、明らかに著者クチャノフの誤りである)。「白」については、宋史楊文廣傳に「白國主」という使用例があるが、なぜ西夏を「白」とよぶのであろうか。王靜如は「白(河)上流の國」の意味にとつたがそうではない。著者はスターン教授の説にしたがって、さきにあげたチベットの口承文學の中で *Idon* とその *epithete* として *prom* が連續する *Idon prom* が使われるが、これは「白 *Idon*」を意味して、この「白」が「白高」の白にあたるのであるという。*prom* は「白」の意味で敦煌文獻に使われ、親族言語(ジャロン語 *pran*)でも「白」を意味する。また、西夏で出版された漢文の經典「佛說聖大乘三歸依經」の跋には「白高大夏國」と譯されている。これらの意見はいずれも妥當であると考えるが、いまの筆者は、この西夏文を「白上大夏國」とすべきか、クチャノフのように「白高大夏國」とすべきか決斷し難い。

西夏の首都は、興州、興慶、中興とよばれたが、中國資料の記載から衙頭とよばれたことも考慮しなければならない。これは單に西夏語の首都名を譯したのではなく、西夏人が名付けた名前であった。元朝秘史では、*ingai* という記載があり、マルコ・ポーロは *ebegrai* と記録しているから、時代によって名稱が變つて、十一世紀から十二世紀の初めには衙頭が、十二世紀の終りから十三世紀初めには *ingai* と呼ばれたのかもわからないという。一二〇五年以降は中興府と呼ばれた。

西夏國の版圖は、甘肅省と陝西省西部にわたる廣い地域であり、東西約一四〇〇キロ(敦煌から黄河沿岸まで)、南北約六五キロ(西寧から黑城まで)に及んだ。五八頁、五九頁に挿入される「十一世紀の西夏國圖」はモスコのソビエト國家圖書館(レーニン圖書館)に所藏される寫本であり、「西夏紀事本末」のはじめに收められる地形圖はこれを少し増補改正したものである。

クチャノフは、元昊の西夏建國を一〇三一年とする。李德明が卒し、元昊が襲位した年を建國年と見做している。即位の年に改元せず翌年初春に改元する西夏の慣例によるにしても、宋仁宗明道元年、契丹が元昊を夏國王に冊封し、宋が定難軍節度使西平王を授けた年、そして元昊自身が吾祖(皇帝)と稱した年、一〇三二年を建國年とするのが當つていよう(日本では、一〇三八を西夏建國年とする考えが傳つていようが、一〇三三年に改めるべきである)。この建國年代の設定は、元昊の在位年數とも關係してくる。元昊の在位は、開運一年、廣運二年、大慶二年、天授禮法延祚十一年とされるが、宋史に示されているように十六年ではなく、クチャノフは十七年とする。これは宋明道元年を即位第一年として計算したためで、建國を一〇三一年とすると、十八年でもあり得るという。この問題は著者も十分參照しているように長部和雄氏が曾て論じ、元昊の在位年數を十七年、改元年數を十五年とした(「西夏紀年考」『史林』十八卷一九三三)。宋景祐元年は西夏開運元年にあたり、その年内に廣運元年に改めているから、開運元年から數えると合計十五年になる。それに順道二年を加えて、在位十七年と考えて誤りではない。

西夏國は、單一民族國家ではなかった。中國人のみならず、ウイ

グル人、トルコ人、チベット人、吐谷渾人がいた。漢人は農耕地域に住み、ウイグル人は西の地域—甘州、肅州、沙州に、チベット人と吐谷渾人は西南の地域、青海と黄河の上流にいた。タングート人と漢人が壓倒的に多数であっただけに、タングート語と漢語が國內でもっともよく通用していたが、西夏國の公用語はタングート語であったという。

西夏國內には多種種類の民族が居住し、それぞれ独自の言葉を話したが、その中でタングート族の言葉が西夏國の公用語として使われ、それを我々は西夏語とよんでいるというように考えるのは順當であり、クチャーノフは、母國語(родной язык)という言葉をしばしば使っている。これはタングート族自身の言葉という意味であろう。しかし、タングート族の言葉がすなわち西夏語であるとするのには、疑問がのこる。第一にタングート族自體が決して單一の集團ではなかった。ミ族・ミ・ニャク族などかなり多種の異った部族を含み、それらがすべて同じ言葉を話したとは考えられない。それにも拘らず、各部族に共通する通信手段を興える目的を以て表意的性格を具えた西夏文字が作られたのであり、この意味で今日残っている西夏語は一つの標準語設定の動きであり、かなり包括的な性質をもつ言語體系であったと筆者は思っている。西夏文字で書き表わされたような西夏語を單一の體系としてもった話し言葉は、實際には存在しなかったのではないか。いわゆる西夏語は、かなり書き言葉的な性格を具えていたのであり、當時のいずれのタングート族についてもその母國語といえる言葉は、今では説明する手段に缺けているのではないかと考える。この問題は、今後言語學の分野で考究すべきであらう。

一〇三七年に設置された蕃漢二字院では、この標準的な西夏語を西夏文字とともに教えたのである。クチャーノフは『西夏書事』の記述にしたがって、漢字院では正草を教へ、蕃字院では篆書と隸書の二書體の西夏字を教えたと言うが、これは疑わしいと思う。篆書の西夏字は涼州にある感應塔(一〇九四)の篆蓋として八字が残るのみであり、隸書の西夏字はいまわかつている限りでは全然存在していない。また漢字院では中國と往來する表奏文を掌り、漢字で書いて旁に西夏字を並べたというが、それにあたる文書も全く残っていない。『西夏書事』がどの資料にもついたのかはつきりしない。

三章でクチャーノフは、西夏語文獻を論據として述べているところが數箇所ある。土地利用の問題、水利・水渠の問題、軍事組織について、『天盛年改新定禁令』(正確には『天盛舊改新定禁令』と讀むべきである)、『新法』(十二世紀末)、『貞觀玉鏡統』(一一〇二—一一一四年の間?)を利用し論じている。本書の特徴はむしろここにあると云えるが、その内容の紹介は別の機會に譲りたい。ここでも著者はレーングラード・アジア諸民族研究所に藏される職官表の斷片を一一三、一一三頁で利用するが、やはりこの職官表の成立年代が問題になるであらう。筆者は、この職官表は『(光定王申)新法』(一一二二?)と『猪年新法』(一一二五?)のいずれかの法典に示される體制と一致するものと考ええる。

四章は、(1)タングート・チベット戦—青海草原における鬭争の始り、(2)タングート・中國戦争(一一〇四—一一〇四四)、(3)第一次契丹・タングート戦争、(4)元昊統治時代の末期、の四項目に分けて述べ、五章は、(1)沒藏氏宮廷派の執政時代、(2)第二次契丹・タングート戦争(一一〇四—一一〇五三)、(3)タングート・中國國境紛争、(4)

諒祥の國內車制への闘いと國際間の西夏の體面、(5)攝政皇太后梁氏の統治、(6)一〇六九—一〇七二年のタングート・中國戰と一〇七三—一〇八〇年のタングートと中國の往來、(7)東部チベットにおける中國政策の尖鋭化と十一世紀後半の東部チベット諸族と西夏の關係、(8)乗常の政權より解任、(9)中國・タングート戰一〇八一—一〇八六年、の九項目に分けられ、六章は、(1)梁家勢力の破滅、(2)十一世紀末における國境論争と西夏・宋の戦い、(3)一〇九六—一〇九九年のタングート・中國戰、(4)乾順の内政、(5)十二世紀第一四半世紀のタングート・中國關係、(6)遼滅亡時のタングート國と金帝國の出現——西寧地域の西夏への併合、の六項目に分かれる。

七章は(1)合達の叛亂、一一四三年の民衆反抗、(2)仁孝の内政、(3)任得敬の夏國分割の企て、(4)仁孝統治期の西夏と南宋の關係、(5)仁孝統治期の西夏と金、(6)最後の繁栄期における西夏國、純佑の統治の六項目に、八章は(1)文字、教育、音樂、繪畫、(2)西夏文字文獻、(3)西夏の佛教史について、祖先崇拜とそのほか若干の宗教信仰、の三項目に、九章は、(1)タングート國への第一次蒙古遠征軍、(2)一二一四—一二二四年のタングート・女眞戰争、(3)西夏への第二次蒙古遠征軍—タングート國の滅亡、(4)タングート族の命運と夏國滅亡後の文化、の四項目に分けて述べている。

最後に著者の結論を要約するところになる。

タングート國の出現は、タングート族發展の不可避の結末であり、蒙古軍に征服されるまで、西夏は中央アジア・東アジアの歴史に、政治上、重大な役割を果たした。半世紀にわたる戰國で、西夏はウイグル汗を甘州から追い出し、そのあとの長い闘争は、東チベット諸族の領地のいくつかを占領した。そして西夏は、中國から印度

とアジア中央部に通じる古い陸路の往來を妨げ、東北チベット南山を横ぎる新しい陸路を開こうとした漢人の再三の試みを失敗に終らせた。これが宋の經濟と政治に反映しない筈はなく、北宋の對外政策の面では、西夏を驅逐する不變の志向となつてあらわれ、經濟面では、對外貿易は陸路とともに海路にも頼るようになり、東アジア地域の通商路の本質的な變化をもたらした。遼と西夏への賠償金の支拂、十一世紀のタングート族との不休の戦いは、宋を財政上行き詰らせ、王安石の改革の間接的な原因の一つになった。蒙古族の侵入に頑強に反抗した西夏は、平和な多くの民族を救つたが、西夏とカラ・ハニダ、カラキタイ、タタール、モンゴル、トルコの諸民族との交渉についての情報を全く欠いているのは残念である。中國の學者周良霄は「關於成吉思汗」と題する論文の中で、「西夏二〇〇年の割拠が中國の歴史に對して起したのは巨大な破壊作用でしかない」(『歴史研究』四、一九六二)というが、これは中國史の見地からのみ見た一方的な評價である。王充は「西夏の興起は決してまったくの消極的な反動的な歴史の逆流ではない。祖國の各族人民が互に融け合つて、一つの民族大家族をなす過程において、タングート族は一つの歴史の力となつて貢獻したのである」という(『論西夏の興起』『歴史研究』五、一九六二)。

タングートの獨自の文化は、舊來の習俗慣例による國家制度の強化と固有文字の創作、西夏文字による世俗、佛教、儒教諸文獻の作成の形であらわれた。母國語の韻書・辭書の綿密な作成は、西夏音韻學の大きい進歩の成果であるし、西夏獨自の音樂や佛畫の特異な筆法も同様であつた。西夏の文化は、中國、チベット、ウイグル文化の錯綜した影響のもとで發展した。中國の影響は、國家統治形

態、中國古典研究に基礎をおいた教育體制の受け入れや支配階級の思想に著しくあらわれた。儒教は自民族を從屬させるために西夏知識人の手にあつた思想上の武器なのである。そして、軍事組織、物質文化、日常生活については、中國の影響はずっと少なかったと感じられる。この著者のあとの意見はそのまま肯定できない。事實、『文海』などをみると、日常生活に使う用器類で、漢語で云々という注をもつ文字、あるいは専ら中國の器物を書きあらわすために作られた文字がかなりあつて、筆者は、とくに東部の地域農耕地域では、西夏人の日常生活の中に、中國の風俗習慣が強く侵入していたものと考ええる。この問題は、西夏語の中に入つた數多くの漢語からの借用語とともに、今後検討しなければならぬであらう。クチャノフはつぎのようにつづける。今一つ重要なことは、タングートの民衆が母國語のみで話し、自身の文字を書き、自身の型の衣裳を着て、古いタングート習俗を保存したことである。民族は獨創文化の有力な保護者であつた。タングートの上層支配層は中國文化を完全に把握するのではなく、興味のあるもののみを借りたのである。

チベットが西夏文化に影響を與えたのは、まず第一に威力のある宗教の中心地としてである。その影響は、チベットの佛教作品の翻譯、密教の西夏佛教への侵透、チベット風聖像畫法に強くあらわれた。チベットの影響は、日常生活と大衆文化に著しかったかも知れない。

ウイグルは西夏の佛教の傳播を促進したが、ウイグルの影響はタングートの聖像畫法に顯著に見られる。ラクダの繁殖の試みは、ウイグル人から借りたことも大いにあり得る。

タングート族の歴史と王朝の歴史は、すべての段階で均等に明らかになつておらず、なお検討と再評價が必要である。多くの新し

い資料が待つており、西夏語文獻の利用にもとずいたタングート族の歴史と文化の研究が今後にのこされている、と著者は本書を結んでいる。

筆者は別の論文の中で、西夏の研究は西夏人の記録を使つて進展させる段階に來たと書いた（「西夏の佛教について」『南都佛教』二十二號一九六八）。今までの研究を大きくくつがえすような西夏人の記録は発見されていないが、いくつかの西夏文獻の解讀を通じて細かい點についての新しい發展は十分に希望がもてるようになった。その目的のために、もつとも惠まれた環境にいる本書の著者クチャノフには、今後の多くの秀れた研究を期待したい。

なお上述の「十一世紀の西夏國圖」のほかに、「夏東北與契丹接界圖」（一五八一—五九頁）、「夏東與宋五路接界圖」（一九八一—一九九頁）、「西夏疆域總圖」（二五四—二五五頁）、西夏國圖（四二頁）の諸國と卷末に、中國語・日本語による文獻目錄、人名索引、地名索引、民族名索引がついている。

なお引用される西夏文獻番號を、Горбачева и Кычанов: Тангутские Рукописи и Книгографы, Москва 1963（「タングート寫本と刊本」）と照合した結果、本書にわずかな誤植があつた。考のため掲げておく。

（西田 龍雄）

誤

正

P. 126		
Note 375	No. 4183	3481
P. 132		
Note 402	No. 5759	579
Note 404	No. 5578	578
P. 282		
Note 94	No. 224	214
そのほか:		
P. 54		
Note 10	CCLII	
	ГЛ 13	14
P. 55		
Note 11	R. A. Stein	
	P. 48	P. 40
P. 86		
Note 185	НИСИДА	
	...Пекин	Токио